



寄り合い所帯
人妻魅了のパンデミック

著 肥田 百恵

「さて、もう家に帰るわ。そろそろ、あの子が来るからね♥」

「深山さん、めっちゃ笑顔……私も今日は沢山ハグしちゃいます！」

「二人とも大胆ですね。でも、やっぱキスが一番ですよ♥」

「えっ、キスしたの？」

「昨日で三回目になります。え、でも結構みんなやってますよ？」

「知らなかったわ。……わ、私もしなければ。それでは、また！」

とある住宅地にて、大勢の人妻から注目されている少年がいた。

少年の名前を翔太という。家族の居ない身である翔太は、施設で暮らしながら生活費を稼ぐ為に毎日とバイトに勤しんでいた。

自転車の荷台に牛乳を積んで団地を直走る少年の姿は、もはや近所において馴染み深い光景となっている。

愛らしい容姿と健気な性格が、女性陣の母性本能を激しく擦ったのだろう。始めは頭を撫でる程度がせいぜいだったスキンシップも、近頃はエスカレートが止まらないようで、事ある毎に女性陣からハグやキスといった過激なセクハラを受けていた。

目次



頁5 PTA会長の誘惑♥♥

第一話 PTA会長の誘惑♥

身寄りのない翔太は、○学生でありながら日々お金に悩まされていた。授業が終わると、そのまま仕事場に赴いて牛乳配達の業務をこなしている。届け先が地元の住宅街なので道に迷うこともなければ、内容的にもそれほど大変ではないのだが、最近は何の事情により仕事が行き詰っていた。

「あう……次は深山さんの家か……」

配達先である深山由紀の自宅に着くと、翔太が面映ゆい表情を浮かべてインターフォンを押す。由紀はPTA会長も務める人格者として世間に知られているが、翔太にとって始末の悪い問題を一点だけ抱えていた。

「どうもおう、翔太くうん！ 待ってたわあ♥」

直後に、ドアが勢いよく開く。

まるで待ち構えていたかのように、由紀が満面の笑顔で玄関から飛び出してきたのは、翔太を思いつきり抱きしめた。

間髪入れず、由紀が翔太を内玄関へと引き摺り込む。

「あぐっ、深山さんっ……く、苦しいです……あ、あうう」

この頃は、ずっとこんな調子である。翔太と同一年の娘を抱える人妻にも関わらず、なにを隠そう由紀は極度のシヨタコンだった。

翔太を特に溺愛しており、会うたび過激に迫ってくる。女性に対する免疫が弱い翔太は、こういった由紀の過剰なスキンシップに尻込みしていた。

「ふふっ。翔太くんってば、今日も顔が真っ赤よ。もおそろそろ慣れても良いんじゃないかしら？ まあ、照れてる翔太くんも可愛くて大好きなんだけどね。ギュくくッ」

翔太が由紀の谷間へと沈んでいく。

これまで、幾たびもハグされ続けてきた翔太だが、未だ赤面して慌てふためくばかりである。由紀は、そんな初々しい反応が堪らなく好きなのだ。

「あ、あの……深山さん。そ、そろそろ……」

「……深山さんって呼ばれるのは嫌だと、何回も言ってるでしょう？ 由紀って呼ぶまで絶対に離さないわ」

「あ、う……ゆ、由紀さん……放してください……」

「ああ、残念♪」

拘束する由紀の力が緩むと翔太が飛び跳ねるように距離を取り、赤ら顔で牛乳を手渡した。

未だ性を知らぬ少年でも、巨乳に圧迫されて芽生える反応が如何なるものか本能的に理解している。

さり気なく隠した下半身について言及される前に立ち去ろうと踵を返した。

「えっと……それじゃあ、牛乳は渡したので……」

「あ、ま、待って翔太くん！ そんなに急いで出ていく必要もないんじゃない？ その……ちよつとだけウチでお茶していかない？ いままでの、牛乳のお礼ということで！」

「お、お誘いは嬉しいんですが、まだ配達が残ってるので」

「なにより、少しくらい良いじゃない。もし誰かに怒られても、私が擁護するから！ ほら、私ってPTA会長な上に、ご近所付き合いも良いからね♥」

「い、あ……で、でも……」

「ほら、中を案内してあげるわ」

飽くまで業務内容は牛乳の配達である。不要な会話など出来るだけ避けてサクサク数を熟すのが配達の極意なのだが、このように由紀が執拗に何度も翔太を誘うせいで、配達が毎回と滞る始末だった。

「それにしても……ホントに、広くて綺麗なお家、ですね。由紀さん、ホントにお金持ちなんですね。スゴイです」

手を引つ張られて、強制的に客間へと連行される翔太が部屋の内観に率直な感想を漏らす。由紀の夫は有名な企業家であり、住宅も相応の水準を誇っていた。

こういった環境に縁のない翔太が辺り一面の高級感に圧倒されるのも当然の話である。だが、愛すべき翔太に感嘆されるも、由紀は表情を複雑そうにした。

「スゴイのは夫よ。私は、ただの気ままな専業主婦だから……」

「……でも、お金持ちって羨ましいです」

「いいえ、家が裕福だからって、必ずしも幸せとは限らないわ」

「それは、どうして？」

「もちろん、娘と過ごす毎日は幸せだけど、夫のことを考える度に、ちよつと、ね。つて、せつかく翔太くんが来てるのに、こんなこと愚痴つちやうなんて、私ったら」

「あ、いえ。えつと……」

ソファ―に座る翔太の隣に、由紀がピタリと腰を下ろして手を重ねた。あまりにも密着な状況に胸を鳴らせるが口にはしない。場の空気が先ほどに比べて僅かに重くなっていることを、翔太は肌で感じていた。

「はあ。世の男が、みんな翔太くんみたいなら良かったのに」

「ど、どういうこと？」

「また愚痴つちやうけど、夫ね、不倫してるの。不倫つて、翔太くんは知ってるかしら？」

「え、ええっ？ 不倫つて……ええっ？」

「あら、知ってるのね。まあ、そんな珍しい話じゃないわ。それに夫に限っては、出会ったときからチャラチャラしていたし、結婚してからという、日に日に私への愛情が冷めていくのも感じていたから不

思議でもなんでもないのだけどね」

「……………」

いつもの澁刺とした由紀の姿は見えない。養うべき子供がいる以上、夫婦にとって表面だけの仲ほど辛いものはないだろう。なんとか慰めたい状況だが、人生の浅い翔太には酷な話である。かける言葉が見つからない翔太は、無意識に重なる由紀の手を握っていた。

「ふふ、ありがと。暫く、こうしていて良いかしら？」

「は、はい……………」

「……………」

「……………」

ソファーに並んで座り、見つめ合いながら静かに手を握り合う。

これで、少しでも由紀さんを元気づけられたら良いなと考える翔太だったが、掌に汗が滲み始めた頃には、由紀の発する重苦しかった気配も一変していた。

「もう駄目。我慢できないわ」

「……………え？」

「…………ふふ。ねえ、翔太くん」

「え、な、なんです？ 由紀さん？」

突然、由紀が膝立ちの姿勢で翔太の下半身に跨った。

二人の股間が重なる体勢に加えて、既に淫蕩の色へと染まった由紀の表情に、翔太が紅潮して慌てふためく。

「しまった！」と思った頃には、もう手遅れである。下腹部に馬乗りして翔太の両肩をグツと掴み、由紀が唇の触れるギリギリまで顔を近づけると、蕩けた瞳で目を見つめてきた。

「キスしても、良いかしら？」

「えええっ？ な、なんで？」

ついさっきまで、不倫する夫を冷ややかな態度で口にしていたクセに……と、翔太が戸惑う。

「ええ、私もどうしようもない人みたいね。それに、もう翔太くんを想う気持ちを止められないの……大好きなの、翔太くん♥」

「ぼ、僕が好き？ でも由紀さん結婚してる……」

「私や娘をほったらかしにする男を、いつまでも愛していられるほど、

私は出来た人間ではないわ。ねえ、いいでしょう？　ここ何日と翔太くんのことが頭から離れなくて困っているの……」

由紀に抱きしめられて吐息が降りかかる。これから起こりうる事態に、翔太は顔から火を噴き出して涙目で固まっていた。

（あああ、翔太くん可愛いッ！　泣きそうになった顔が犯罪的に可愛すぎるわ。もうだめ……だめだめだめっ、我慢、できないっ！）

首を縦に振るまで待ち続けるつもりだったが、翔太への愛情に痺れを切らしてしまった由紀は、まさしく犯罪的に唇を重ねるのだった。

「ん、ふうっ……んっ、んはあ……はあ……」

「んむううっ、んっ！」

夢にまで見た翔太とのキス。由紀は成就と共に軽いオーガズムを感じながら、我を忘れて遮二無二と翔太の唇を貪った。

「んっ、むちゅっ、ちゅうっ、んっ、はあっ、あっ、んあああ♥」

数分が経過する。お互いの息が上がるも、由紀は唇を離そうとしない。息切れを起こした翔太が空気を取り入れようと口を開くが、すぐさま由紀が自らの紅唇で塞いでしまう。

暫く二人の舌が絡み合うと、次第に翔太の瞳が性を孕んで情火に苛まれていった。

「んっ、ふうっ、んむっ、ちゅぱっ、ちゅくちゅくちゅ、んっ、はぁ……幸せだわぁ。もしかしたら、夫が不倫するのを私は待っていたのかもれないわね。これで、やっと翔太君に愛を捧げられるっ、翔太くんっ、んっ、ちゅくっ、ちゅるるっ、ぷちゅっ、ちゅくっ……大好きっ、好き、好き好き好きっ♥ んっ……しようふあくん、どお？キスって、ひもちいいでしょ？」

「ふうっ、んあっ、はっ………」

翔太は答えない。しかし、様子からして答えは明らかである。翔太は、これまで何度も他の人妻達から唇を奪われてきたが、その殆んどが不意打ちによる一瞬の出来事だった。

キスの感覚をしつかりと堪能したのは、実質これが初めてといっていい。舌を纏れ合わせ、唾液を交換するキスに、翔太は生まれて初めて官能を覚えていた。

「は、はうう……はぁ、はぁっ、はぁっ………」

もつと喰らい付きたい気持ちを抑えつつ、ゼイゼイと呼吸を整える様子を見かねた由紀が唇を解放する。

「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ……」

「うふふふふ。キスで達しちやった。こんなの初めてよ♥」

由紀がこの上なく上機嫌で下半身を揺らす。度重ねた翔太との情熱的なキスにより、局部が断続的に緊縮して打ち震えていた。

由紀が愛でるように翔太を抱き寄せて優しく頭を撫でる。

「少しやりすぎたかも。うっとりしてるように見えるけど、そんなに気持ち良かったのかしら？」

由紀が問うも、翔太からの応答はない。

初めての性的快感に直面して戸惑っているようにも見える。それを酌量して、翔太が落ち着くまでは大人しくするつもりだったが、由紀の臀部を突き上げんとする、硬くて卑猥なモノがそうさせなかった。

「あら、翔太くんも、もう普通に勃起する年頃なのね♪」

腰を下ろした翔太に跨りながら、キスをしていた由紀に宛がっていた硬いモノ。当然、それはズボンを突き破りそうなほどギンギンに反

り上がった翔太のペニスだった。

「……………っ！」

隆起する股間を指摘されて我に返る。

性に狭量な年頃において、勃起の状態を女性に指摘されることほど羞恥心を覚える瞬間はないだろう。この場を逃れようと必死に抵抗をするが、由紀に全体重で押し掛かれてはそうもいかず、翔太はそのまま恥ずかしそうに顔を伏せてしまった。

「落ち着いて。勃起は恥ずかしいことじゃないわ」

「そんなことないです……………うう、すごく恥ずかしいです……………」

「愛おしいほど純粹ねえ。ここは、こんなに男らしいのに♥」

「あ、あああっ！ お、お尻で擦らないで……………」

ズボンの上で屹立するテントに乗りかかる由紀が、臀部を押し当ててグリグリと動く。濃厚なキスやハグにより、官能が絶頂の間際まで高まっている翔太は、それだけで達してしまいそうだった。

「あっ、あああっ、助けて、助けてえっ！ こ、これ、頭、おかしくなっちゃうしそうっ……………！」

「翔太くん、もしかしてイクの初めて？　だとしたら……初めての射精がコレなのは勿体ないわね。あなたの初精液……私がちゃんと頂くことにするわ♥」

そう言って由紀は翔太から離れて、服を脱ぎ始める。仕舞いには一糸纏わぬ姿になり、艶めかしい華麗な肉体が露わとなった。

「あ、う……」

人妻らしいムツチリした肉付きや天性の巨乳。そして鮮烈に輝く秘部は青少年の目に毒だろう。生まれて初めて目にする女性の裸に、翔太は声も出せず俯いてしまった。

猛暑と言われた夏の日に、あれだけ激しい接触をしていたせいか、由紀の全身は汗まみれである。女の甘酸っぱい汗の臭いがムワツと漂うと、翔太のテントがより主張を示した。

「ごめんなさい、汗臭くて……あら、おちん○ん、物凄く暴れているわね。私の身体に興奮しちゃったのかしら？」

「——っ！」

「嬉しいわ。こんな人妻の身体でも反応してくれるなんて」

「あ、あう……」

「さっ、あなたの裸も見せて？」

「あっ、ヤ、ヤです……女の人になんて、見せられないっ！」

「そんなこと言わずにさ。パンツの中とか、我慢汁でグショグショになつてて気持ち悪いでしょ？ それに、良い？ これは、誰もいつか必ず通る道なの。あなたのお友達だって、何人かはもう同じような経験をしていると思うわ」

「そ、そんな。で、でも僕、どうすればいいか、わ、わからないよ」

「大丈夫。全て私に任せてくれれば良いわ」

「……………」

「……私のこと、嫌い？」

「そ、そんなこと、ない、です……」

「ありがとう。それじゃあ、いい？」

「……………はい……」

卑怯な誘導により翔太が粒のような声で同意する。由紀は喜悦の叫びを懸命に堪えつつ、ゆっくりと服に手をかけた。

「翔太くんのおちん○ん、初披露といきましょう。はあ、はあ、はあ、お、落ち着け私……ふふふふふふ……」
「……………」

笑みの零れを止められず、涎を垂らしてTシャツを脱がす由紀に、翔太が早くも前言を後悔してしまう。だが、そうこうしている内に服は次々と脱ぎ捨てられ、最後の一枚であるパンツも容易く剥ぎ取られるのだった。

そうして現れる翔太の象徴。

年相応の小ぶりの牡竿が天井に向かって反り上がっている。その小作りの形状に、遂に由紀が歓喜の堰を切った。

「きやあーっ！ 翔太くんのおちん○ん！ 翔太くんのお○んちんだわ！！ なんか、すっごく可愛らしい！ ○学生のおちん○んって、こんなに可愛いんだ。これ、ホント超可愛い……穢れを知らない、新鮮なおち○ちん……ゴクリ……」

クールかつシニカルと知れた由紀の、かつてないハイテンションである。まるでスターに出会った少女のように、由紀は翔太のイチモツに

大はしやぎを見せていた。

「はわああああ。我慢汁がどっぷり漏れていて、かなり熱いわっ！それに……スウ……ッ……とつても臭いの。恥垢っていうのかしら？ゴミが溜まっついて汚いのね。あああ、小ぶりの翔太くん……♡」
ペニスを撫でたり臭いを嗅いだりと、やり放題だった。

「………つつっ！」

言わずもがな、陰部の老廃物まで指摘された当人は悶絶する勢いで含羞に炙られている。大人の女性に性器を弄られる羞恥に耐えられず、両手で顔を覆い全身をプルプルと震わせていた。

「翔太くんのおちん○ん、とっても臭いわ♡ ふふ、恥ずかしがらなくて良いのよ、誉め言葉だから。一切使用されていないんだもの、臭くて当然よね。あああ、こんなに愛おしいだなんて思わなかったわ。ああああ……欲しい。いますぐ欲しいわ！ あむうつ………んっ、ふっ、ちゅうっ………」

情欲が限界まで沸き上がると、由紀は飢えた獣のように御馳走へと齧り付いた。亀頭を咥え、飴を舐めるように我慢汁を啜っている。

「んっ、ちゅううう。じゅるっ、ちゅくっ、ちゅっ……」

「あああああっ！ ゆ、由紀さんっ、な、なにをつ！ き、汚いですよ……ぼ、僕の……あうっ、うああああっ！」

「フェラよ。んっ、ぢゅっ、ちゅくっ。男性が最も好むエッチといつて良いわ。はむっ、んっ、それに、翔太くんのおちん○んは全く汚くないわよ。んっ、じゅっ、じゅっ。いえ、少し語弊があるわね。確かに亀頭にゴミが溜まっついて汚いけど、全然不快じゃないってこと。翔太くんのゴミなら、いくらでも舐めとって綺麗にしてあげられるから♡」

「うぐっ、はあっ、はあっ……そ、そんな……あああっ！ な、なんかくるっ、なんかくるうっ、あっ、ああああっ！」

既に快楽も限界まで達していたようで、咥えられて数秒もしない内に、翔太が腰を跳ねらせて断末魔のような叫び声をあげた。

直後、燃えるように熱い液体が由紀の口内に迸る。それが二度、三度と断続的に続くと、翔太の全身も連動するようにビクツビクツと脈打った。

「あ、あああ……あつ……」

口の中が翔太の白濁液で一杯になる。

由紀がそれを躊躇わず一息で飲むと、うつとりと顔を綻ばせた。

「ちよつと酸っぱいけど、美味しいわ。ありがとう、翔太くん……大好きよ♥ こんな気持ちになったのって、何十年ぶりだろう。心の内に、何かが広がっていく感じ。とっても幸せだわ♥」

亀頭にキスをする由紀も余韻に浸っている。ここ十年近く性行為で興奮を覚えなかったせいで、由紀は自分がもう閉経期に突入したのではないかとまで考えていた。

（ただ、夫に飽きていたただけなのね。私も、まだまだ女みたい。翔太くんに触れてるだけで、こんなに昂っちゃうんだから。これって、もしかして恋なのかしら。やだ、どうしよう。娘の同級生に、こんな感情を抱いてしまうなんて……♥）

「つて、翔太くん、大丈夫？ 賢者タイムに入っちゃった？」

虚空を見つめて惚ける少年に、由紀が焦る。呼びかけながら肩を揺すると、翔太が我に返った。

「あ、あ。だ……だ、大丈夫です」

「ぼーっとしちやつて、そんなに気持ち良かったのかしら？　初めてのエッチ♥」

「あう、ぜ、全然わかんないです……なにがなんだが……」

「でも、気持ち良かったでしょ？　涎まで垂らしちやつてたよ？」

「……こ、こんなこと……しちやつて良いんでしょうか。こういうのは、その……もつと大人になつてからだ……」

「翔太くんは本当に純粹なのね。今どき、○学生でもエッチくらい普通だつて聞いてるわ。実際、娘の佐紀にも彼氏がいるくらいよ」

「そうなん……ですね。佐紀さん、彼氏がいたんだ……」

「あら、もしかして狙つてた？」

「い、いえ……そんなこと……ないです」

「あらあら。隠さなくても良いのよ？　ふふ、娘に恋してくれるなんて嬉しいわ。娘は私にソックリだつて、よく言われているもの」

「そ、それつて、どういう……」

「言つたでしょ。私は、翔太くんが好きな。大好きなの。翔太くん

は、私のこと、好き？」

全裸で密着した状態から、そんな質問を投げかけるなんて意地の悪い話である。この有り様で想いを突っぱねる度胸が翔太にあるなら、これまでの一連は有り得なかったろう。翔太は、茹でダコのように顔を真っ赤に染めながら、消えるような微かな声量で由紀に「好き」と答えた。

「翔太くん。私、幸せでどうかしちやいそうだわ。ありがとうね、年取った人妻の、こんな気持ちを受け止めてくれて」

「い、あ……はい……」

自然な流れで唇が重なった。ふっふつと湧き上がる幸福感に、射精で萎え気味だった翔太の陰茎が復活の怒張を遂げると、由紀が柔らかく微笑んで立ち上がる。半ば誘導尋問のように愛を捻りだした翔太だったのが、様々な体験や愛を与えてくれた由紀に少なからず萌える感情を抱き始めたのも事実だった。

「翔太くん、もう元気になったのね。ふふ。なら……最後まで行きましょうか」

「え、最後まで、って？」

「もちろん、セックスよ。といつても、まだ知らないかしら。まあ、私に任せて、ね？」

「はい……」

指で開帳された秘部に、翔太の視線が釘付けされる。ねっとりした熱い視線を一身に浴びながら、由紀は熟された肉壺を以て青筋立った肉竿を芯まで包み込んでいった。

ソファ―に座る翔太に正面から騎乗する対面座位の姿勢である。由紀は、この体位を最も好んでいた。

「ふふ。どう？　どんどん……入っていく、わっ。翔太くんも準備万端ってところね。皮が剥けて、とつても硬くなってる……」

「う、あああつ、な、なにこれ……あ、熱いのが……僕のモノがすごい熱いっ！　どうなってるのこれっ！　あああつ、あうっ！」

「これがオマ○コ。女性器の味よ。肉で圧迫されていくの、気持ちいいでしょう？　人類は、もう何万年もの間、コレに夢中なんだから」



淫唇と陰茎が擦れて卑猥な粘液音が響く。未知の快感を前に、翔太が鼻にかかった声で喘ぎ出した。

自身になにが起きているのか、正直さっぱり分からないが、とにかくいまは由紀に全てを委ねて、降りかかる快感を目一杯に味わおう——といった様子で快樂を受け入れる。

一方で由紀も、未成熟なペニスの特色や、翔太に受け入れられた事実から、異様なほどの興奮を覚えてしまい、貝口より愛液が氾濫して翔太とソファ―を万遍なく濡らしていた。

「あああ……翔太くんのおちん○んが入ってるわ！ はあ、はあ……一突きされる度につ、んっ……なにかも満たされていくような、そんな気分よっ！ まるでっ、んっ、魔法にかかったみたい！」

「はあ、はあ、はあ。僕は由紀さんが喜んでくれて嬉しいです……」「ありがとう。でも、私だけ満足するのは嫌よ。翔太くんも、一緒に気持ち良くなりましょう？」

「僕も、気持ちいい、ですよ。でも、よく分かんないです……自分の体が、自分のじゃないみたいな感じで……はあ、はあ……」

「まあ、仕方ないわね。さつきまで童貞だった……いえ、これまでも絶頂に達した経験がないというなら、ね。少しずつ慣れていきましよう？」

翔太もしっかり快楽に浸れるよう、由紀が腰の突き落とすペースを緩める。気持ち良くなりたいたい自分がいるのは確かだが、それ以上に由紀は幸福感に満ちた翔太が見たかった。

「ほら、見て。あなたのおちんち○が私にすっぽり埋まっているわ」

「はあ、はあ、はあ……ゆ、由紀さんっ、お、お胸、大きすぎます……僕……が、どうなってるのかなんて全然見えないです」

性に無知な翔太は、自分のペニスが現在どのような状態を迎えているのか理解できていない。接合部分を確認したいが、由紀の豊満な巨乳に阻まれて見えず、広大な谷間に埋もれていた。

「ふふ。天然の巨乳よ。子供の頃から大きくて、悩みも絶えなかったわ。それより、今日は色んなことを初体験したわね。快楽や、フェラ、射精、裸体、セックス……でも、まだおっぱいの感触は確かめていないんじゃないかしら？ もっと、揉んだりして良いのよ？」

「じゃ、じゃあ……失礼します」

腰をサイドに揺らして、翔太に乳ビンタを喰らわせる。実は興味があつた由紀の巨乳に手を伸ばし、その果実に指を喰い込ませた。

「うあつ……すごい、柔らかい……」

右手で乳房を軽く摘まみ、力を加えた分だけ指が肉に沈んでいく様に、翔太が感動する。今度は両手で左右の乳房を弄ってみる。それを何度か繰り返していると、次第に由紀の声に官能が孕み出した。

「んはあ……優しい手つきね。もつと強く揉んでも良いのよ。あとは……私、翔太くんに乳首を舐められたいわっ♥」

「乳首……な、舐めるって、こうですか？」

おずおずと恥ずかしそうに訊ねるも、翔太は既に由紀に対する性を許容しており、見た目より抵抗なく舌を出して突起物に宛がった。

「ひあつ、あああつ、くううつ……♥ 翔太くん、上手すぎだわっ。

あつ、それ、良いわっ……もつと、強く吸ったり……思いつきり噛んだりしてっ！」

「あむっ、んちゅっ、ちゆるるっ、ちゆくっ。噛む……？ んっ、カリッ、コリッ、ぢゅっ、ちゅぱっ」

「ひやあああっ！ ああああ……はあ、はあ……も、もつと……強くお願い。とても気持ちいい、わあっ、はあ、はあ……」

まるで乳児のように、翔太がギンギンに浮き立つ乳首をしやぶり尽くす。さらに指示を忠実に受け止め、乳首に歯を立てて優しくガリガリ鳴らすと、由紀はオーガズムの渦に吞まれて何度も意識を失いかけていた。

「んはあっ、あひいいいっ！ 乳首を弄られるだけなのに……こんな気持ち良くなつたの、初めてっ！ イ、イクッ、またイツちやうっ！ んっ、ふあああっ、あっ……翔太くん、翔太くんっ♥️ 好きっ、大好きっ！ もつと、舐めて、吸ってっ、噛んじやってっ！」

「は、はひっ。んくっ、んっ、ちゅっ、んっ、んぶううっ、カリッ、ガリガリッ、ん……はっ、あっ、ゆ、由紀さんっ。ぼ、僕ま、また出しちやいそうっつ！ あうっ、あっ、あっ！」

突然、翔太が音を上げる。胸乳を愛撫しながらも、ヌルヌルと濡れそぼる由紀の膣口に責められ続けて限界に達したのだ。オーガズムを迎える翔太のペニスが本日最大の怒張を遂げると、由紀も喜びに染まった嬌声を轟かせた。

「ひああっ！ 翔太くん、イキそうなのね。良いわっ、このまま出しちゃって。私も、もうイク……というか、さつきからイクツばなしっなの。乳首っ、気持ち良くてっ、そのまま、千切れるくらい齧ってっ、ちん○んで私の奥まで突っついてええっ！」

「あっ、出ちやう……出ちやうっ！ ああっ、ふあああああっ！」

絶叫と共に、翔太の悦楽が炸裂した。

淫肉で締め付けられたペニスが、搾り取られるように精液を迸らせる。濁流を子宮で全て受け止めると、由紀が陶醉したように瞳を蕩けさせて恍惚に浸った。

「ああ……精液っ、熱い精液がお腹の中で広がっていくわ……っふう、ふう……翔太くん、翔太くんっ！」

「あうっ、はあ、はあ……はあ……由紀さん……」

共に名前を呼び合い、仰け反らせた身体をわなわなと震わせる。意識を失いかける程の壮烈なエクスタシーから、二人は暫く動けずに、繋がったままの状態で名前を呼び合っていた。

……それから一刻余りが移ろう。先に由紀が立ち上がり、体液で汚れた翔太をタオルで拭きとり始めた。

「あつ、すみません。後は僕がやります」

「良いのよ、翔太くんは寝てて。初めてのセックスで疲れてるでしょ？ ココは、まだ元気そうだけどね♪」

体力を相当に消耗したらしい翔太は、ソファーにグッタリとしていて。僅か十数分の出来事だったが、翔太にとってはこれ以上ないくらい濃厚な時間だったろう。

「ごめんね、翔太くん。仕事の途中だったのに、私の我儘で色々なことをさせちゃってさ」

「あつ、そっか……仕事の途中だったんだ！ あう、寝てる暇なかったです。急いで配達が続きに行かなくちゃ……」

「ごめんね。もし怒られたら、私の名前を出して良いから」

「あ、ありがとうございます……ううう、身体が重い……このまま眠りたいかも……」

「……………ドキッ♥」

目を閉じて身体を預けてくる翔太に、由紀が胸を高鳴らせて赤面する。いつそ、このまま仕事をサボらせようかと考える由紀だったが、寸でのところで理性を優先にした。

「だ、ダメよ。疲れてるだろうけど、勝手に仕事をサボったら大勢に迷惑がかかってしまうわ。いや、無理やりエッチまでした私の言えることではないのだけれど」

「そ、そうですね。じゃあ、仕事に行ってきます。あ、その……無理やりじゃ、ないです、から。僕ホントに由紀さんのこと、あの……」

「！　ありがと……ちゅっ♥」

由紀に全身を綺麗にしてもらい、翔太が服へと着替える。玄関口での去り際に優しく抱擁すると由紀が唇を重ねてきた。

「それじゃあ、行ってきます！」

「いってらっしやい♥」

ふふ。この掛け合い、興奮しちゃうわ。

私、翔太くんとエッチしちゃったのよね。いえ、それより翔太くん、私のことを好きって言ってくれたわよね。それがなにより嬉しくて仕方ないわ。

恋人……は、無理よね。一番の理想は、翔太くんを引き取ってずっと一緒に暮らすことかしら。一緒に暮らす？ やだ……考えただけでアソコが濡れてきちゃったわ……♡

翔太の後姿を見ながら、由紀はそんな妄想をしていた。